

ロレンスの ‘THE REVOLUTIONARY’

— 暗黒の神サムソンの変革 —

松 本 桂 子

〔抄 録〕

D. H. ロレンスは43歳という比較的短い生涯の中で、長編小説、中・短編小説、戯曲、詩、エッセイ、紀行文などの膨大で多岐にわたる作品を残している。しかし、詩人としての彼の評価は小説に比べて低く、その芸術性は長年無視されていた。1950年代の後半になり、ようやくロレンスの詩は注目されるに至った。『鳥・獣・花』の詩集は、自然界に実存する動植物を題材にうたわれたものであるが、その中でも本稿で取り上げる「革命家」という詩は文字通り異質の題名をもつ。この作品に秘められた詩人ロレンスの思惑を、詩全体につきまとう闇への下降志向と、彼の宗教観とを照合しながら探求することをここでの目的とする。

キーワード：暗闇、サムソン、ヨハネの黙示録、復活、再生

「革命家」(The Revolutionary) は、ロレンス (D.H. Lawrence, 1885-1930) の詩集『鳥・獣・花』(*Birds, Beasts and Flowers*, 1923) の「果物」(Fruits) の章、六番目に編成されている作品である。「葡萄」(‘Grapes’) の詩の次に、突然現れたような「革命家」というタイトルは、果物との関連性が全くなく、予備知識のない読み手にとっては一瞬の戸惑いを感じさせることであろう。しかし、その詩の中には、「果物」はもちろんのこと後に続く「木」(‘Trees’)、
「花」(‘Flowers’)、
「獣」(‘Beasts’) などの詩篇に共通する闇の世界、即ちロレンスの哲学の根幹を成す暗黒の神の存在が顕著に現れている。「葡萄」の詩で詩人はうたう「神はかつて黒人種だった、今は白人種であるように」(Once God was all negroid, as now he is fair.)⁽¹⁾、「目を閉じ、巻きひげのからんだ葡萄酒の道と他界を降りてゆこう」(Close the eyes, and go / Down the tendrilled avenues of wine and the otherworld.)⁽²⁾。ロレンスの望む別世界とは、広大無辺の始原の暗闇である。そこでは、かつて神々も黒い肌をもっていた。「革命家」の詩中で繰り返し使用される“dark”と“dusky”、“pale”や“white”などの言葉は、この黒い神と白い神をイメージさせる。また、詩集で前出されている「無花果」(‘Fig’)、
「葡萄」、
「セイヨウカリンとナ

ナカマド」('Medlars and Sorb-Apples') の中でもこのような言葉は頻繁に見られる。ロックウッド (M. J. Lockwood) が、「革命家」の詩は「葡萄」で描かれた復活の物語りがどのような結末に至るのかをドラマチックに表現したものであり、サムソンが移動する闇の世界は「桃」、
「石榴」、
「無花果」などに見られる世界のひとつである⁽³⁾、と述べているように、詩集に収められた作品群は、ロレンスの思想が一連化されたものと解釈できる。これらのことを踏まえて、「革命家」での暗黒の神の真意を探てみると、そこには、ロレンス独特の異端的とも言えるキリスト教精神から発せられた、教会人の権威に対する非難、特に『ヨハネの黙示録』への強烈な反発がこめられていることが分かる。

ロレンスは1912年5月にイングランドを離れてドイツに渡り、ヨーロッパ大陸を経てセイロン (現スリランカ)、オセアニア、アメリカ合衆国、メキシコなどを巡り、世界をまたに架ける流浪生活を送った。『鳥・獣・花』は1920年の秋、イタリアのトスカーナで書き始め、1923年、38歳の年にニューメキシコで完成した」(The poems of *Birds, Beasts and Flowers* were begun in Tuscany, in the autumn of 1920, and finished in New Mexico in 1923, in my thirty-eighth year.)⁽⁴⁾と『全詩集』(The Complete Poems of D.H. Lawrence, 1964) の序文でロレンスは述べている。『鳥・獣・花』に収められた「革命家」の詩は、イタリア中部トスカーナ州のフィレンツェで書かれた。ギリシア建築を題材としてうたわれているが、ロレンスがギリシアを訪問した記録はなく、おそらくイタリアとエーゲ海を挟んで隣接した神話と伝説の故郷であるギリシア、神々たちの世界を思い浮かべて書かれたものであると思われる。

これより順を追って考察してみよう。

Look at them standing there in authority,
The pale-faces,
As if it could have any effect any more.

Pale-face authority,
Caryatids,
Pillars of white bronze standing rigid, lest the skies fall.⁽⁵⁾

「女人像柱」(Caryatids) とは、ギリシア建築様式で用いられる女性の姿をした彫刻柱のことである。ヴィーナスの彫刻たちが官能的な美しい裸体をさらしているのに対して、女人像柱たちのしなやかな肢体は、首まですっぽり衣服で包み隠されていることでも分かるように、その造形には冷厳・厳格・高貴・秩序・節度・理想主義などの意味が込められている。この連で使用されている“authority”や“pale-face”、“effect”、“rigid”などは正に冷厳・厳格な柱の姿を描写している。「空が落ちぬように」(lest the skies fall) と頭で支え続けている女人像柱に向かっ

て詩人は呼びかける、「青白い顔の権威者よ」(Pale-face authority) と。支えているのは単なる天井ではなく、全能者にて主なる神が御座する天国である。

次いで詩人は嘆息する。

What a job they've got to keep it up.

Their poor, idealist foreheads naked capitals

To the entablature of clouded heaven.

When the skies are going to fall, fall they will

In a great chute and rush of debacle downwards.⁽⁶⁾

空が落ちてきたならば、自分たちも「大洪水の急流の中」(In a great chute and rush of debacle downwards) へと落下して行くにもかかわらず、天空を支え続けていなければならぬとは、なんという役目にあるのだろうか。そういう訳で、女人像柱の柱頭は、詩人にとっては「つまらなさそうで理想主義者のむき出しの額」(Their poor, idealist foreheads naked capitals) に見えるのかもしれない。

しかも支えているその天国は「超ゴシック建築」(the high and super-gothic heavens) だと云う。

Oh and I wish the high and super-gothic heavens would come down now,

The heavens above, that we yearn to and aspire to.

I do not yearn, nor aspire, for I am a blind Samson.

And what is daylight to me that I should look skyward?

Only I grope among you, pale-faces, caryatids, as among a forest of pillars that hold up the dome of high ideal heaven

Which is my prison.⁽⁷⁾

「超ゴシック建築」とは、崇高にそびえるキリスト教会を指すものであり、支える女人像柱は、それに群がる権力を持った教会人たちの象徴である。しかし、人々が理想の場として思いを寄せる天国を、詩人は憧れることなくむしろその天国が失墜することを願っている。何故なら、「私は盲目のサムソン」(I am a blind Samson) であり「天国は私の監獄」(Which is my prison) だからと説き明かす。

女人像柱への形容は更に続く。

And all these human pillars of loftiness, going stiff, metallic-Stunned with the weight of their responsibility

I stumble against them.

Stumbling-blocks, painful ones.

To keep on holding up this ideal civilisation

Must be excruciating; unless you stiffen into metal, when

It is easier to stand stock rigid than to move.⁽⁸⁾

これら「高慢な人間柱」(all these human pillars of loftiness)は、「その責任の重さ」(with the weight of their responsibility)故に「金属かと思わせるほどに堅くなってゆく」(going stiff, metallic-stunned)。盲目のサムソンは、堅くなった女人像柱を、聖書にある「躓きの石」⁽⁹⁾(Stumbling-blocks)、「苦しみの塊」(painful one)と呼び、その石に躓く自分(I stumble against them.)を、まるで不信仰者であるかのようにあえて云わんとする。しかし同時に、「この理想の文明」(this ideal civilisation)を支え続けることの苦悩に対する同情心をも示している。

それにしても、サムソンとはイスラエルの英雄で、神から遣わされた士師ではないか。何故サムソンが天国の崩壊を望まなければならないのであろうか。ここで名乗るサムソンとは、旧約聖書の中の、目を潰されてペリシテ人ともども自爆した怪力のサムソンでもなく⁽¹⁰⁾、ミルトン(1608-74)の『闘技士サムソン』(*Samson Agonists*, 1671)でもない。ここで云う「盲目」のサムソンとは、天国とは対照的に光を奪われた別世界、つまり闇の世界から誕生したロレンス独自のサムソンだと想像できる。

This is why I tug at them, individually, with my arm round their waist,

The human pillars.

They are not stronger than I am, blind Samson.

The house sways.

I shall be so glad when it comes down.

I am so tired of the limitations of their Infinite.

I am so sick of the pretensions of the Spirit.

I am so weary of pale-face importance.⁽¹¹⁾

盲目のサムソンにとって、天国は「神の契約」(the limitations of their Infinite)と「見せか

けの聖霊」(the pretensions of the Spirit)、そして「青白い顔の尊大さ」(pale-face importance)によって拘束された監獄であり、「全くうんざりさせられる」(I am so tired / I am so sick / I am so weary)と繰り返す。それ故に、血の通わない堅くなった金属のような「女人像柱の腰に腕を回して、ひとつひとつ強く引っ張り」(I tug at them, individually, with my arm round their waist)、天国に対して反逆を起こすと云う。その上に、「天国が落ちてくる時、私はとても嬉しい」(I shall be so glad when it comes down)とまで云い放つ。建物が頭上から落ちてくるのをぼんやりと待つよりも、自らの手で引き倒し、旧約聖書の士師サムソンのように瓦礫の中に埋もれてしまうと云うのか。一方、「神の契約」、「見せかけの精霊」、「青白い顔の尊大さ」、「監獄」などの言葉は全て、権力に満ちたキリスト教会を示唆したものであると考えられる。ヨーロッパでは事実上、ほとんどの道徳がキリスト教に基づいている。しかも、宗教の人に与える影響の強さを思えば思うほどに、ロレンスはキリスト教によって人間の自然性に沿った道徳が曲げられていることを懸念するのである。

時に、悲痛ともいえるサムソンの叫びは暫し自問自答し始める。

Am I not blind, at the round-turning mill?
 Then why should I fear their pale faces?
 Or love the effulgence of their holy light,
 The sun of their righteousness?⁽¹²⁾

「神聖な光輝」(the effulgence of their holy light)、「高潔の太陽」(The sun of their righteousness)はいずれもキリストの象徴であり、何故それを愛さねばならないのかと問う。その答えは明らかである。前にも述べたように、ここでの盲目のサムソンは、捕らえられて「粉引き小屋で働く」(at the round-turning mill)⁽¹³⁾神から使わされた本来のサムソンではない。従ってこの連では、天にある神を恐れもせず、愛す必要のないことをも強調している。

ここまでの女人像柱と天国に対する、語り手、つまり盲目のサムソンの反発的な叫びは、やがて血の通う肉体を持った人間観へと一変する。

To me, all faces are dark,
 All lips are dusky and valved.

 Save your lips, O pale-faces,
 Which are slips of metal,
 Like slits in an automatic-machine, you columns of give-And-take.⁽¹⁴⁾

人間の「全ての顔は黒く、全ての唇は浅黒い」(all faces are dark, All lips are dusky)、しかもそのくちびるには「調節弁が付いている」(valved)。「調節弁」とは文字通り、容器の口などに取
り付けて、気体や液体の出入り調節をつかさどる器具である。程よく釣り合いのとれるように
調整できるバルブは、人の発する言葉の慎み深さを表現しているのかもしれない。片や、「青白
い顔たち」(pale-faces)の唇は、「金属の失敗」(Which are slips of metal)で「自動販売機の硬
貨投入口ようだ」(like slits in an automatic-machine)と云う。“slips”は「道徳上の過失」を
意味するものであり、“metal”や“an automatic-machine”は血の通わない冷酷なものの比喩
であろう。興味深いのは、5行目から6行目の「交換し合う円柱たちよ」(you columns of
give-And-take)という表現である。この言葉の裏には、金満体質の商業主義的な権力者への皮
肉が見え隠れしていて、道徳的過失を犯し、金を貯め込む底なしの口を「慎め」(Save your
lips)と、現代の理想主義者たちに裁断を下そうとしているものと受け取れる。

やがて、肉体をもった人間と観念的な神との対比とも思われる盲目のサムソンの主張は、闇
の中へと徐々に降りてゆく。

To me, the earth rolls ponderously, superbly
Coming my way without forethought or afterthought.
To me, men's footfalls fall with a dull, soft rumble, ominous and lovely,
Coming my way.

But not your foot-falls, pale-faces,
They are a clicketing of bits of disjointed metal
Working in motion.

To me, men are palpable, invisible nearnesses in the dark
Sending out magnetic vibrations of warning, pitch-dark throbs of invitation.
But you, pale-faces,
You are painful, harsh-surfaced pillars that give off nothing except rigidity,
And I jut against you if I try to move, for you are everywhere, and I am blind.
Sightless among all your visuality,
You staring caryatids.⁽¹⁵⁾

足下の大地奥深くにある「闇の世界」(in the dark)では、人間は顔も唇も黒く「目には見えな
いが触れることのできる近い存在」(men are palpable, invisible nearnesses in the dark)なのだ。
また、盲目のサムソンにとって、人間の足音は「鈍く」(dull)、「柔らかくゴロゴロと音をたて」

(soft rumble)、「不吉ではあるが愛すべきものでもある」(ominous and lovely)。それに反して、「青白い顔たちの足音は金属の切れ端がガチャガチャと鳴り」(They are a clicketing of bits of disjointed metal) 不快な音がする。彼らの顔は「苦しそうで、外面はザラザラで荒削りである」(You are painful, harsh-surfaced pillars)。しかも「厳格さ以外は何も生み出しはしない」(that give off nothing except rigidity)。盲目のサムソンは、このように内なる生命を持たぬ人工的な女人像柱の中において「動こうとするならばおまえたちに躓く」(And I jut against you if I try to move) と憤慨し、「おまえたち皆が視覚を有する中において、私は盲目で何も見えはしない」(and I am blind, Sightless among all your visuality) と嘆いてみたりもする。これらサムソンの怒りと嘆きは、有徳の士だけが潤う社会的不公正への悪に対するものであるのかもしれない。

ところで、この連での詩人は「足音」(footfalls) という表現に執着しているように思われる。ロレンスの闇の思想が、坑夫であった父の働く炭坑が原型とされていることを、今ここで思い起こしてみよう。ロレンスの自伝的小説『息子たち、恋人たち』(*Sons and Lovers*, 1913) の中で、地上へ引き上げる炭坑夫たちの様子を次のように描写している。

Down the main road the lights of the other men went swinging. There was a hollow sound of many voices. It was a long, heavy tramp underground.⁽¹⁶⁾

炭鉱の中を、カンテラを持って移動する男たちのうつろな声と、重たそうに引きずる足音の響きは、「革命家」の中の柔らかくごろごろと音を立てて歩く人間と合い通じるものがある。何よりも、「革命家」での人間の顔も唇も黒いという表現は、正に煤まみれで真っ黒になって働く炭坑夫たちの姿をありありと蘇らせるではないか。自然人とも言える父親からの資質を受け継いだロレンスは、地底の闇の男たちの足音に、以前から人間的な共感を覚えていたのであろう。ロレンスにとっての闇とは、地球の暗い地核に存し、生命の息吹を感じさせる本源的な意味を含むものである。

彼の求める暗黒の神もまたそこに存在する。散文集に収録されているロレンスの哲学的エッセイ「王冠」(‘The Crown’) の中で彼は、暗黒の神について次のように言及している。

What way is it that leads me on to the Source, to the Beginning? It is the way of the blood, the way of power. Down the road of the blood, further and further into the darkness, I come to the Almighty God Who was in the beginning, is now, and ever shall be. I come to the Source of Power. I am received back into the utter darkness of the Creator, I am one again with Him.⁽¹⁷⁾

ロレンスを源泉まで導いてくれる道は、血の道 (the way of the blood)、力の道 (the way of

power) であり、その道をさらに闇の奥深くに入ってゆくと全能なる神 (the Almighty God) に出会い、彼は創造主の完全な闇 (the utter darkness of the Creator) に抱き取られる。これによりロレンスが暗黒の神との一体化によって、永遠への参入を願っていることが明確となる。

詩に戻り、見逃してならないのは「地球はあらかじめの考慮やあと知恵なしで私の方へやってきながら、重々しく優雅に回る」(the earth rolls ponderously, superbly coming my way without forethought or afterthought) という表現にある。「あらかじめの考慮やあと知恵」とはどのような意味を含むのであろうか。聖書の『創世記』では、初めに神が天と地を創造して、地球、自然、生命、人間の全てが神の不思議なわざにより創造されたことが語られている⁽¹⁸⁾そして『黙示録』において、神による創造が完成されることを予言している⁽¹⁹⁾。しかし、ここで述べられている「あらかじめの考慮やあと知恵なしで重々しく優雅に回る」地球とは、神の意図的な創造物ではなく、自然発生的な生成であることを暗示しており、人間の存在自体も自然であり、人間と世界との関係が偶然であることを強調している。つまり、ニーチェ (Friedrich Nietzsche) の影響を多分に受けているロレンス⁽²⁰⁾は、「神が死んでしまった」世界には始めもなく終わりもないという思想を、この連において見え隠れさせているのである。こうして、「革命家」の詩中において白い神は完全に否定される。

これより、盲目のサムソンの挑戦的で破壊的言動が激しさを増す。

See if I don't bring you down, and all your high opinion
And all your ponderous roofed-in erection of right and wrong,
Your particular heavens,
With a smash.

See if your skies aren't falling!
And my head, at least, is thick enough to stand it, the smash.⁽²¹⁾

「一撃で、おまえたちを倒せないかどうか考えてみる」(See if I don't bring you down,...With a smash) とは反語的用法で、「簡単に倒せるのだぞ」と天に向かい威嚇している。女人像柱が支えているのは「特殊の天国」(Your particular heavens) で、しかもそれは「高貴な見識」(high opinion) を持ち、「善と悪の重々しい屋根で覆われた建物」(ponderous roofed-in erection of right and wrong) である。本来ならば、人間性に沿っていたはずの善悪の価値観が、高貴な人々、強力な人々、つまり権力者によって位置付けされ卑屈な思想によって曲げられたと云うのか。天上界における善悪の価値判断に対して、シニカルな表現で盲目のサムソンは強く訴え続ける。そして、牢獄のような天国を憎む盲目のサムソンは、そこに閉じ込められているよりはむしろ天国そのものを破滅させ、自らも自爆しようとする。さもないれば、この世界は白い

神の思いのままになるのだから。しかしながら、ここでの盲目のサムソンはそうたやすく死にはしない。「私の頭は少なくともその衝突に充分耐えられるほど強い」(And, my head, at least, is thick enough to stand it, the smash.) のだ。

激しい威嚇は、最終連にていよいよ頂点に達する。

See if I don't move under a dark and nude, vast heaven

When your world is in ruins, under your fallen skies.

Caryatids, pale-faces.⁽²²⁾

盲目のサムソンが「暗くて、むき出しで、広大な天国の下で」(under a dark and nude, vast heaven) 動いたその時には、「おまえたちの世界は廃墟となるのだ、おまえたちの落ちてきた空の下で」(When your world is in ruins, under your fallen skies.) と予言する。『ヨハネの黙示録』の最終章では、あらゆる悪を破滅させて神の最終的な勝利を祝い、天国では選ばれし者たちが神の君臨を永遠に喜ぶ⁽²³⁾。しかし、ロレンスの「革命家」では、逆に天国の失墜を望みそれを実行せんとする。

ロレンスはキリスト教の風土の中で、敬虔なクリスチャンである母親から溺愛されて育った。それ故に、彼自身もキリスト教の影響を強く受けたし、キリスト教の教理を知りすぎるほどに知っていた。同時に、ある半面では反発も感じていた。特に『ヨハネの黙示録』に対しては「ごく幼い頃からずっと生理的な嫌悪を抱いていた」(But the Apocalypse is, and always was from earliest childhood, to me antipathetic.)⁽²⁴⁾と、ロレンスのエッセイ『アポカリプス』(Apocalypse, 1931) の中で自ら述べている。しかし、彼が「革命家」で起こそうとする謀反は、決してキリスト教そのものではなく、神の名において地球を滅ぼし、他人を支配し己のみが栄光の座に着くという、権力意識の我意に対するものであった。むしろ、ロレンスはキリストに対しては暖かで優しい気持ちで接していたのではないだろうか。このことは『鳥・獣・花』の「アーモンドの花」('Almond Blossom') の詩の中で以下のように証明される。

Sweating his drops of blood through the long-nighted Gethsemane

Into blossom, into pride, into honey-triumph, into most exquisite splendour.

Oh, give me the tree of life in blossom

And the Cross sprouting its superb and fearless flowers!⁽²⁵⁾

「花咲く命の木」((the tree of life in blossom) や「華麗で恐れを知らぬ花を咲かせる十字架」(the Cross sprouting its superb and fearless flowers) は、エルサレムのゲッセマネ⁽²⁶⁾(Gethsemane) の苦難の地にてひとり罪を背負い、血を滴らせて (Sweating his drops of blood)

ゴルゴタの丘⁽²⁷⁾まで歩くキリストの姿を彷彿とさせる。この詩においてロレンスは、キリストへの帰依と感謝の誠心を表している⁽²⁸⁾。ロレンスは、元来のキリストに対しては人間的な共感を抱いていたのである。

さて、「革命家」の詩ではいよいよ最終行にて、語り手が盲目のサムソン以外のもう一人の正体を明かすこととなる。

See if I am not Lord of the dark and moving hosts

Before I die.⁽²⁹⁾

「私が死ぬ前に考えてみる、私が黒くて移動する天使たちの神でないかどうかを」と、ついに「私」が闇闇から舞い上がって来た天使たちの神であることを告白する。「革命家」における「私」とは、詩題のとおり革命を起こす者、語り手であるロレンス自身、盲目のサムソン、あるいはサタン、そして神という複数の役割を担っている。ここでの神とはキリストではなく、闇の世界の暗黒の神であることは疑いようがない。聖書はしばしば光と闇の対象を用いて、神と悪の力との絶対的な相違を示している。神は光であって、神の内には暗いところが少しも無いように描かれている。また、闇と呼ばれる悪の力と対比して、神は光なる存在として明瞭に述べられている。『ヨハネの黙示録』では、築き上げられた聖都エルサレムは、神の栄光で光り輝き、日や月に照らされる必要はなく、夜のない都市として記されている⁽³⁰⁾。ロレンスはこれらのことを意識した上で、あえて闇から独自の暗黒の神を生み出したのである。そして、女人像柱の支える天国をサムソンによって破壊させんとすることにより、自らを神と名乗り、結果黙示録の修正を計ろうとしたのである。

ロレンスが憧れる闇とは、ゴールであるとともに源泉と始原でもある。そこは、大いなる栄光と力を持つ全能の創造主を有す。彼は、『創世記』以前の原初、つまり神が「光よ、あれ」⁽³¹⁾と命ずる前の暗黒の世界を望み、闇の世界に在る神を肯定し、「革命家」の詩において、闇からの暗黒の神の再生をより強く暗示させたのである。盲目のサムソンは、天国を崩壊し自らも身を焼き、一度は死んで灰と化しても、やがては伝説の不死鳥のごとく暗黒の神として蘇ってくる。即ち、「革命家」における『ヨハネの黙示録』への反発の裏には、キリスト再臨に代わる暗黒の神の「復活」の意図が込められていたと考える。

冬枯れの大地にも、春には草が萌え、樹木は芽吹く。やがて花が咲き、夏が過ぎ、収穫の秋が訪れる。冥界の王ディオニュソスの乱舞に浮かれて、穀物は実り、果実は生まれる。そして、暗黒の神もまた再びこの世に生まれ出でる。ロレンスの詩集『鳥・獣・花』で復活と再生がうたわれる数々の作品の中に、異質のタイトルをもつ「革命家」という詩が含まれていることは誠に納得のいくことであり、ここにロレンスの強い意図を感じずにはいられない。

〔注〕

- (1) Vivan de Sola Pinto and Warren Roberts (ed.). *The Complete Poems of D.H. Lawrence*. Harmondsworth: Penguin, 1993. p.286.
- (2) *Ibid.*, p.287.
- (3) M. J. Lockwood. *A STUDY OF THE POEMS OF D.H.LAWRENCE*. New York: Palgrave, 2002. p.187.
- (4) Vivan de Sola Pinto &. *op.cit.* pp.28-29.
- (5), (6), (7), *Ibid.*, p.287.
- (8) *Ibid.*, p.288.
- (9) 新約聖書『ローマの人への手紙』第9章33節 日本聖書協会 1961.
- (10) 旧約聖書『士師記』第14章-16章
- (11), (12), Vivan de Sola Pinto &. *op. cit.* p.288.
- (13) 旧約聖書『士師記』第16章21節
- (14) Vivan de Sola Pinto &. *op. cit.* p.288.
- (15) *Ibid.*, pp.288-9.
- (16) D. H. Lawrence. *Sons and Lovers*. Harmondsworth: Penguin, 1958. Chap. 2. p.43.
- (17) Warren Roberts and Harry T. Moore (ed.). 'The Crown' in *Phoenix II*. London: Heinemann, 1968. p.377.
- (18) 旧約聖書『創世記』第1章1節-27節
- (19) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第22章5節
- (20) T. R. Wright. *D. H. Lawrence and the Bible*. Cambridge: The Press Syndicate of The University of Cambridge, 2001.
- (21), (22) Vivan de Sola Pinto &. *op. cit.* p.289.
- (23) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第22章5節
- (24) D.H. Lawrence. *Apocalypse*. Harmondsworth: Penguin, 1995. p.61.
- (25) Vivan de Sola Pinto &. *op. cit.* p.305.
- (26) 新約聖書『マタイによる福音書』第26章57節
- (27) 新約聖書『マタイによる福音書』第27章31節-33節
- (28) 古我正和「ロレンスのアーモンド賛歌」佛教大学『文学部論集』第86号2002.
- (29) Vivan de Sola Pinto &. *op. cit.* p.289.
- (30) 新約聖書『ヨハネの黙示録』第22章5節
- (31) 旧約聖書『創世記』第1章3節

(まつもと けいこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：古我 正和 教授)

2003年10月15日受理

